〔文化財報告〕

昭和42年度　千葉市指定文化財調査報告書

千葉市文化財保護審議委員
和田　茂右衛門

I　怨閑塚について

怨閑塚は、誉田町2丁目11の3番地にあります。不受不施派の重鎮として知られている日経の弟子である怨閑日浄上人が、寛永12年に処刑された場所で、そのとき殉死した俗僧信者の遺体を葬った塚があります。これを人呼んで「怨閑塚」または「お経山」といわれているのです。当時の宗教界について、少し述べておきたいと思います。

日経師は、天文20年（1551）2月28日、上総一宮領南谷木一松で生まれました。一説には、永禄3年（1516）生れともあります。幼くして京都妙満寺の末寺で得度し、下総中村檀林あるいは飯高檀林に学びました。奥州巡遊から帰国後、慶長2年（1597）9月、上総東横川（いまの大網白里町）に、宝立山方墳寺を建立して、七里法華の教風刷新をはかりました。そして不受不施の教義の布教に活発な活動をしました。当時の野田村草分け28軒の人々は、日経の教義の信者となっておりました。日経は、慶長5年に妙満寺の貫主となり、元和8年（1622）、佐渡に渡ろうとして、61才で没したと伝えられています。

日浄師は、奥州二本松の問答に破れて、日経師の弟子となりました。寛永4年（1627）、日経師の方墳寺には、弟子の玉雲が住しておりましたが、十ケ寺派と紛争を起こし、日経の残党として、代官三浦監物のために方墳寺は破却され、玉雲と信者3名は江戸の獄舎につながれました。そして玉雲は獄死して、信者は三宅島に流罪となりました。この時代に、野田教域は日浄師が継承して、寛永11年（1634）3月、本門山本覚寺を野田村の今井本家の南隣（現在の自転車屋と消防器具置場跡）に建立し、この寺を本陣として、その周辺各地に活発な布教陣を敷きました。

しかし、日浄師も例外ではなく、代官三浦監物の弾圧にあって、寛永12年（1635）8月7日、真蔵院の窓月日盛、本行院の日徳、信者の長右衛門（誉田1丁目230番地、渡辺伊吉家）、市右衛門（誉田1丁目　森幸雄家・俗称ミキヤ）およびその女房らとともに捕えられました。江戸に護送され、獄につながれて、8月下旬に江戸から東金まで引廻し、同年9月5日、野田十文字ケ原で磔刑に処せられ、本覚寺は焼き捨てられました。

村人には斬首と伝えられたが、恐らく磔刑の上斬首されて、さらし首にされたのではないでしょうか。この処刑があると、高田村の八右衛門家（俗称ミナミノイエ）の女房が日浄に同情して、鎌腹をして自殺殉死をとげております。結局、この野田殉教事件には、2名の女性の犠牲者を出しています。

日浄師の首級は、夜陰ひそかに信者が盗み取って、はじめ本覚寺の寺域に埋め、そののち五日堂の付近に埋葬し、その目じるしに1本の杉を植えたそうです。そして刑場には、6人の遺体を埋葬して塚を築き、これが怨閑塚と呼ばれているわけです。なお、その付近に「血洗の池」というのが残っています。

その後、寛永12年9月5日、高田村の源左衛門（現高田町・高橋鎮治家）という方が、五日堂（いまの公民館）の隣に追善供養のため五輪塔を建てましたが、幕府の目をはばかって、土中に埋めて置いたそうですが、現在は掘り出して地上に祀ってあります。五輪塔の隣に、信者の力で小庵を建立し、その後明治11年（1878）に再建され、村民は毎月5日に参集して御題目を唱えます。人びとは、いまは公民館ができていますが、この小庵のことを「五日堂」または「五日寺」と呼んでいます。

この法難にもめげず、不受不施派は「納戸題目」、「内証題目」または「かくれ行門」と称して、軟化した僧俗を排して地下に隠れ、幕府の目を逃れて、ひそかに新門徒として発展していきました。

その後、万治3年（1660）12月22日、千葉市内

浜野の本行寺第10世日尚、同本行寺の日逞、生実の本満寺第８世日清、および高田の常真寺日宏ほか６人の僧呂が十ヶ寺側と争論して、不受不施派の徒として処刑されました。日尚は三宅島へ、日逞と日清は大島へ流罪となり、日宏は備中松山に配流になりました。

その後も、寛文６年（1666）５月、野呂村妙興寺の日講は、強義の罪にふれて配流となりました。寛文９年（1669）には、不受不施派の寺請を禁止され、厳重なる法度が定められ、この付近の村々から差出す宗門改帖には、必ず切支丹御改めと御禁制悲田不受不施之宗門改めのことが書き入れてあります。

いま一例を挙げると、椎名下郷（いまの椎名崎町、富岡町等）の安永４乙未年の宗門法度書をみるに、「日蓮宗之内悲田不受不施之者かくて無御座候事、一、切支丹并邪宗門之者は不及申上惣て宗旨に付少茂怪敷様子之者御座候はば早速可申上候事」とあって、その厳重なことが想像されます。

たび重なる法難弾圧にあいながら、彼等のいわゆる「内信心の者ども」は、随所に小座の題目の集りをもって、納戸題目となり、同行に死者があったときは、菩提寺に通報する前に引導文で葬式をすませてしまいます。この内証題目講は、また「かくし行門」とも呼ばれていました。この題目講では、本尊は宗祖、開祖、泰師の三幅を祀り、旦那寺は形式的な存在で、かくの如く形式的に菩提寺をもつところに内証題目講の特色があって、しかも謗法の十ヶ寺派を離れて、地方の特異な秘密教団となりました。

いま一つ、この題目講を地下に追いやったものは、幕府のあくなき弾圧と、他宗、自宗の他派からのつきあげが、そのようにさせたのではないかと考えられ、また宗教界の暗斗の所産とも考えられます。

この題目講が盛んに行われたのは、千葉市内では、浜野．村田．生実．野田．高田．野呂などで、現在も高田町には２～３戸ぐらいの納戸題目が残っているそうです。時移り星変つて、明治の初期に解禁されたとはいいながら、昭和の今日となると、老人たちの昔物語にすぎなくなりました。いまでは、そのことを知る人も少なくなったそうです。

この誉田１丁目にある鎮守八幡神社の境内で、春４月15日に土壇を築いて、そこで祭礼を執行しますが、この時は社家は一切預からず、長左衛門家（いまの渡辺伊吉家）が主催となって取りしきりますが、これを「春祭り」または「野講義」と呼んでおり、これこそ偽装した納戸題目講の祭礼ではないかと考えられます。しかし渡辺さんは、これを否定しています。永年の習慣から、これを否定し続けるのではないでしょうか。現在は集会所で行うそうです。

なお渡辺家には、日経、日浄両師の曼荼羅、その他の資料があります。また野呂町の妙興寺には、寛永９年（1669）４月に不受不施が法度となったについて、谷中の感応寺、碑文谷の法華寺、小湊の誕生寺の三寺連名で、「妙興寺之末寺寺院の末末まで誓詞を差上ぐべき」旨の、同年５月22日付の通知文書が残っています。

以上、怨閑塚とその当時の信仰（千葉市内に限る）について述べましたが、怨閑塚が不受不施の法難史上に欠くことのできない史蹟だと思われますので、これを千葉市の史蹟として指定することは意義あることだと考えられます。

第１図　怨閑塚の近景（沢本吉則撮影）

Ⅱ　五日堂と五輪塔について

誉田１丁目にある集合所跡に、かって「五日堂」という小堂がありました。これは寛永12年（1635）８月７日に代官三浦監物の弾圧によって、日浄をはじめ６人の人びとが磔刑に処せられ、日浄の首級を信者等が盗み、本覚寺境内に埋め、のちに五日堂脇に埋葬しました。寛永12年（1635）９月５日、高田村の源左衛門が五日堂脇に追善供養のため五輪塔を建立しましたが、幕府の目をはばかって土中に埋めておきました。現在は掘り出して、杉の大木の根元に祀ってあります。

その横に、無上院の日東が撰文した碑が建てられていて、それによると次のように書かれています。

怨閑日浄上人等僧俗六人刑せらるゝや信徒其夜陰密に上人の首級を奪い去って之を本覚寺の境域に埋めて更に之を総墓地に歛葬し杉苗一株を植えて其目標となす高田村源左衛門五輪塔を建てて供養す而も惇る所ありて之を土中に埋む爾来二百数十年碑空しく影を失い杉樹常へに栄えて双幹の巨木となる明治十一年七月五日墓地掃除の際鎗田岩五郎樹辺を掘れとの夢を感ぜりと告げ山本又右衛門外一名亦同一の夢告を得たりと和す衆其の奇異に驚き翌六日相携へ樹辺を発掘して此の五輪を得たりと言う。

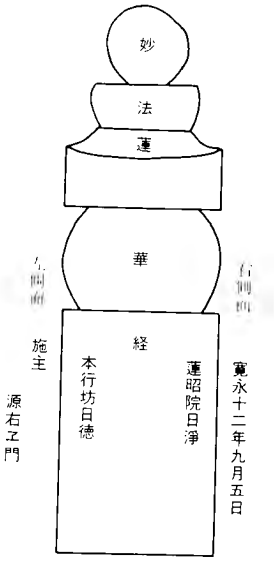
今玆大正甲子秋九月殉教建碑の事あるにあたり記して以て世に諗ぐと云爾

常楽寺再興沙門無上院日東謹誌

第２図　五日堂の五輪塔（筆者撮影）

以上のようにあって、此の五輪塔が日浄の首の埋葬地に建てられた供養塔であれば、怨閑塚と同様不施不受の史蹟として指定することは、意義あることだと考えられます。

五日堂は、五輪塔の付近に信者によって、小庵を建立せられて、村民は毎月５日に参集して、御題目を唱えて供養しました。のち明治11年(1878)五日堂を再建しましたが、今はとりこわして、そのあとに集会所が建っています。



第３図　五日堂の五輪塔実測図（縮尺８分１）

Ⅲ　聖宝寺と雨降獅子について

椎名崎町の聖宝寺は、もと聖法寺と称し、その創建は詳かではありませんが、明治44年（1911）刈田子町の宝蔵寺と合併して、寺号を現在の聖宝寺と改称しました。千光院の末寺で、本尊は阿弥陀如来、堂宇は６間半に５間です。

当寺には、「雨降獅子」（あめふりかっこ）と呼ばれた獅子頭があって、これは雨乞の行事に使用したものです。この雨降獅子について、村人の話を綜合してみますと、獅子頭は行基菩薩の作と伝えられております。第６図の写真にみるような男女獅子とも顔の巾19㎝、長さ40㎝、高さ13㎝、背布の長さ60㎝、前布の長さ60㎝で、背布は男獅子が赤青白の色紙を細く切り、下から張りつけて段々と上の方へ張りつけていきます。女獅子は白赤の色紙で作られています。

男獅子は角が枝をうっています。また女獅子は角に枝がありません。前布は男が紫、女が赤です。顔は杉枝でできていて、松のコケを張りつけ、ヒゲは糸状のコケを張りつけてあります。男獅子の

角と角との間に、昔は宝珠が載っていて、それに梵字が書いてあったそうです。これで構造の大体はおわかりと思います。

ここで申し上げたいのは、「雨降獅子」と呼んでいますが、実物は獅子には縁遠く、雨降竜と呼ぶのがふさわしいと思いました。大正3年の「御宝物虫干雨請挙行順序」が記された文書には、かっこして「雨竜」としてあります。

次に、行列について、最後の雨乞を挙行した明治27年の模様を、老人から聞いてみたままを申し述べてみます。当時日照続きで、何日も雨がなく、水田も旱上ってしまったので、村中相談の結果、雨乞祭を挙行することに定まりました。

まず、7日間のみそぎの行をして、斉戒沐浴身を清め、聖宝寺で支度ができ上ると、初めに椎名神社へ登って、社前で雨乞祈願をして舞い、それから区長宅で舞い、次に刈田子村の高梨家に向います。高梨家では、庭先に舞台を造り、この舞台で舞い、それが終ると、一行は土足のままで高梨家の御休所にあてられた奥座敷に獅子を祀ってお休になるそうです。その間高梨家では酒を振舞い行列の人びとにご馳走を出したそうです。それから聖宝寺に帰って、それで終るそうです。

このときの行列の順序をみると、まず露払役と称する山伏が2人、次いで先導役の天狗役と猿田彦命役が2人、男の子がつとめる笹すり役が4人ないし6人、その後に、白衣を着て獅子頭をかぶり、胸に小大鼓をつけ、それをたたきながら「雨乞ひ御獅子御歌」というのを唱いながら、しかも舞いつづけながら巡幸します。そのとき男獅子1人、女獅子1人です。そして最後に警護役が10人ぐらい、上下姿に一文字笠をかぶって続きます。

以上の役は、すべて家々の長男すなわち相続人によって奉仕されます。そして、日照の時に雨乞に出して舞うので「雨降獅子」と呼ばれております。雨乞祭をしても雨が降らないときは、神主が切腹したという話も残っているそうです。しかし、弥勒踊ではともかく神主が関係しているが、獅子の巡幸には神主の参加はありませんので、神主の切腹ということはどうかと思われます。それともかっては神主も巡幸に参加したのでしょうか。

獅子の巡幸が終ると、寺の庭で弥勒踊がはじまるそうです。これは男子だけで踊るものだそうです。この踊りは、中央に神主を置き、その周囲に円形の輪になって、踊りながら廻るのです。最初に神主が「鹿島神宮の屋の棟に御幣が一本立って候、これを神主不思議に思うぞよ、さあさあおんたち申せ」と云うと、周囲の輪が、口々に「とこ千年、とこ万年、弥勒がつづいて、ボッチがととうで、焼飯をころがす」と、これをくり返えしながら廻る。

伝承で弥勒とは、「己の日が三日ある月が六ヶ月ある年を弥勒年といい、この年を弥勒年豊年年という」と伝えています。これが弥勒踊と直接関係があるかどうか。以上申し述べてきたところをみてくると、雨乞祭も弥勒踊もいずれも豊年祭につながるものがあると思われます。

この雨乞祭も、いまでは耕地の整理と水利工事の普及発達のため必要がなくなり、亡びかけています。元来、日照りつづきのときに降雨を神に祈願する祭なので、日照り相手では祭の日は一定せず、毎年行われるわけでもなく、祭の伝承は忘れられるばかりで、その上いまの人達は雨乞祭をしたから雨が降るなどとは、老人を除いてはほとんどが信じなくなっています。

また実際問題として、椎名崎町でも明治27年以来、獅子頭その他の道具の虫干だけ行われているが、雨乞祭は中止のありさまで、このままでゆくと、雨乞祭は亡んでゆくのではないかと思われます。それ故にこそ、この行事を調査して、資料だけでも残しておきたいと考えて、今回の調査を行いました。

関係文書および道具類

1. 「雨乞ひ御獅子御歌写」

〔表紙〕 大正拾参年
雨乞ひ御獅子御歌写
千葉県千葉郡椎名村

〔本文〕

「佐しでてこれの御門を見もほさば門の扉も小金なるものを

「あれみさへなよそのささらとさしちごうて大雨津つちの津ばむ如くだ

「秋萩を折りてかざりて其の下でいざやねまりてあそぶ友達

「今朝までは思ひもよらぬてあさぎりがおりてそうこで女獅子が隠くされた

「風のかすみも吹きはろてそうこで男獅子がおほぞや嬉しや

「男獅子めが女獅子見かけて心の中こそ花の都だ

「男獅子女獅子が肩ならべた

「松にからまる蔦の木も縁が切れればほろりほろりだ

「あれみさへな我が里では雨が降るかで雲がたつおへとま申していざや帰へるべい

「世の中は万後末代みろく御代がヨヲナ続いた

「誠や鹿嶋浦にみろくの船がヨヲナつづいた

「友たんに伊勢と春日の中では鹿嶋の御社

「おやしろでちごが踊らば御摩堂ではヨヲナ御摩を燃き

「御摩たかばたたもたけかしみろく続けやヨヲナたき候

「天笠はなちかひけて候たたらふ舞がヨヲナきこゆるたたらをばあとふみ候たたらたんとやヨヲナ八つふむ候

「鎌倉はいつも正月男が若水ヨヲナいただいた

「頂いた桶の中には鎌倉海老かなヨヲナ九ツ五ツをば

「宿ひ置き候四ツおい国のヨヲナ土産に

（以上）

第4図　雨乞祭に使われた太鼓やホラガイ、笛　（聖宝寺蔵）

2. 行中心得

一、行中は各自斉戒沐浴し敬神の本志を失はず一心不乱に降雨を祈る事

二、行中は相互に平和を主とし赤誠以て神明に祈請する事、但祈禱中は各自禁酒すること

三、行中は私愛私情を不顧且つ専横の行為無き様謹慎すること

四、行中は上下一般時間を確守し私用の為め無沙汰に行場を出でざること

五、行中一個人として用件ありたる場合は其旨指導者へ告げて退出すること

六、祈禱を終へて御神酒を互に酌み交はす場合に於ても前項の規定を守り決して粗暴の行為ある可らず

七、喫飯は総て半数ずつ交代すること

八、行中は総て法螺貝を以て合図すること

以上

右之規定堅く相守可申事

大正三年八月八日

椎名崎区役所

第5図　「御宝物虫干雨請挙行順序」（椎名神社蔵）

第6図　雨降獅子（右が男獅子、左は女獅子）（聖宝寺蔵）